

文学

台湾の「白色恐怖」時代を描く

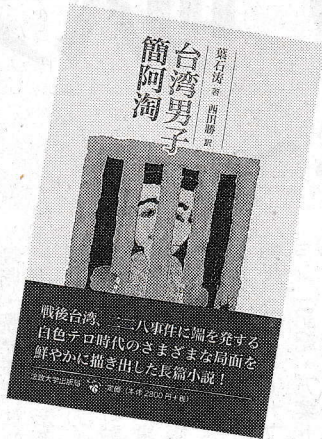
「簡阿洵」という共通の主人公に託して描いた作品集

星名宏修

葉石涛著
西田勝訳

▶台湾男子簡阿洵

1・10刊 四六判244頁 本体2800円
法政大学出版局



昨年、台湾では1960年代の「白色恐怖」が背景となった映画『返校』が大ヒットした。共産党の内戦に敗れた国民党が台湾に中華民国政府を移転させたのは1949年のこと。「大陸奪還」を掲げる国民党は、台湾島内の「敵」を徹底的に弾圧した。これが「白色恐怖」である。

1950年代に本格化した白色恐怖の被害者は、戒厳令が解除される87年までに14万人近くになり、そのうち3000人以上が処刑されたといわれる。台湾の人口は日本のおよそ6分の1。社会に与えた影響の大きさが分かるだろう。映画『返校』は、台湾の若い人たちに自らの社会の過

酷な歴史を想像させるきつかけになったのである。「台湾男子簡阿洵」の作者葉石涛(1925-2008)も白色恐怖の被害者だ。1951年9月に共産党員との交友の疑いで国防部保密局に逮捕され、54年まで獄中に囚われていた。罪名は知情不報(事情を知らずに報告せず)である。そうした体験を「簡阿洵」という共通の主人公に託して描いた作品集が『台湾男子簡阿洵』だ。翻訳は1996年の草根出版社版による(同書は1990年に前衛出版社から「50年代白色恐怖自伝小説」という副題つきで刊行されており、収録作品が草根版とは一部異なっている)。

巻頭に置かれ、簡阿洵の二八事件への関与を描いた小説「夜襲」が発表されたのは、戒厳令解除以前の1985年。台湾の戦後史に大きな傷痕を残した1947年の二八事件以上に、白色恐怖に言及することは、また大きなタブーだった。この連作は、葉石涛の実体験を題材として、1947年から70年代半までは台湾社会の一端を読者に伝えるものとなっている。

白色恐怖によって囚われたさまざまな人々の獄中での姿を描いた「鹿窟哀歌」は、とりわけ興味深い。日本留学の経験があり、魯迅の友人だった外省人の大学教授は、共産党に資金提供した嫌疑で囚われた身となっている。同じ獄棟には「台湾民主自治同盟」の幹部や「台湾共和国」の国防部長などの政治犯も収容されているが、ある時30人以上の貧しい農民たちが収容されてくる。台湾北部の山岳地帯に位置する鹿窟出身の彼らは、ある「農会」――実は台湾共産党――の影響下で、呂といふ先生から「義勇軍行進曲」(中華人民共和国の国歌)や読み書きを習ったというのだ。この名前を聞いて、簡阿

洵は行方知れずになった先輩作家の呂石堆ではないかと推測する。日本による植民地時代に日本語で優れた小説を書き、バリトン歌手としても知られていた呂赫若の本名だ。農民のひとりと語るうち、呂先生が毒蛇にかまれて命を落としたことを知るのだった。「訊問」という小説も紹介しよう。ある年の晩秋に、主人公が警備総司令部に連行され、訊問される顛末を描いたものだ。作品中の時間は明確には示されていないが、簡阿洵が20年前に釈放されたという記述から、1970年代半ばの出来事ということになる。3年前に釈放された旧知の政治犯との交友が疑われたのだ。訊問のなかで、その友人が台湾文学の研究に興味を持っていて簡阿洵のために、尾崎秀樹の『旧植民地文学の研究』を日本から取り寄せてくれたことが明らかになる。訊問者は問う。「台湾文学とは何だ? 旧植民地文学とは? 腹が一杯になって、することがないと、こんな妙なことに手を出すのか?」「大陸奪還」を唱えた国民党にとって中華民国は唯一正統の中国だった。彼らにと

て、「台湾(文学)」などに関心を持つのは「妙なこと」であり、疑うに足る事態だったのである。小説「訊問」が書かれたのは1989年。その2年前の87年2月、また戒厳令が解除されていない時期に、葉石涛は『台湾文学中綱』を刊行した。清代から80年代までの「台湾文学」の全体像を記述した画期的な文学史である。

2018年10月、葉石涛を含む白色恐怖の被害者がかつて受けた罪名の取り消しがようやく行われた。2008年に亡くなった彼は、「知情不報」の汚名を生前に濯ぐことはできなかったのだ。

近年、台湾への日本人観光客は増え続けている。魅力的な観光スポットや美食だけでなく、時間が許せば台北の国家人權博物館(白色恐怖景美紀念園)に足を運んでみてはいかがだろうか。日本による植民地統治から解放された後の台湾が、どのような歴史を歩んできたのかを考えると、ができる格好の場所である。「台湾男子簡阿洵」が描いた世界の恐ろしさをあらためて感じることもできるだろう。(台湾文学研究)

芸術